

福祉文教常任委員 入杉 百合子

## 1 神奈川県大和市 大和市立引地台中学校分教室

「学びの多様化学校（不登校特例校）について」

引地台中学の同じ敷地内にある別の建物を利用しているが、校門が別にあるので生徒は利用することに抵抗感が少ないのではないかと感じた。「学校らしくない学校」の姿は、行き着くところ、何でも自由に、子ども達のしたいことをやらせてみることにあるのではないかと参考になる点がある。

「不登校座談会」だ。不登校の子ども達同士で、それぞれの不登校になったきっかけなどを話し合う場とお互いを理解し合う場となる。市長のトップダウンで設立したが、分教室としてのデメリットで、予算が思うように使えない点を挙げている。分教室にするか、独立校にするかは検討する点である。

不登校の生徒をサポートするためには、「適度に放っとく」ことがどれだけ我慢できるかになる。卒業後の相談と連携は、かなり必要となるので、マンパワーが大事となる。

## 2 神奈川県川崎市 川崎ラクシル（官民共同運営）施設見学

「運営面の仕組み、評価課題などについて」

民間が「指定管理者」ではなく、同じ建物の中でそれぞれの立場で運営していることに驚いた。

指定管理者ではないので独自の運営ができ、更新手続きの煩わしさもないのが良い。

利用者が、高齢者と障がい者を受け入れている点が、長野県とは違う。高齢者も特養で従来形とユニット形があり、さらに聴覚障害対応があり充実している。障害者支援も知的・身体・精神と区別していて、更に宿泊型自立訓練が精神のためにあるのが素晴らしい。リハビリテーションセンターは官民共同で運営していて大変利用しやすくできている。官の方には、看多機型居宅介護施設があり、中は事業所内保育園と繋がっている。社会福祉法人・三篠会の経営内容が、県内の法人とはレベル的に違うが、今後の方向性の参考になるのではないかと思う

## 3 神奈川県川崎市 川崎市子ども夢パーク

「子供の権利条例との関係、行政のかかわり」

「川崎市の子どもの権利に関する条例」が24年も前にできていて、その具現化を目指した施設であることに感銘した。運営に関わる組織の体制が、官民双方によるものであり運営資金も驚くほど潤沢であることも判った。すでに開所以来20余年を超えていて、持続可能な運営を目指していることは間違いない。

日本初の公設民営のフリースペースは、あたかも雑然と見えるが、自由に遊び活動し、休息して自分を取り戻し、ありのままの自分であることができる居場所として、我が町の子どものための政策に取り入れることは十分に検討する事例と思われる。そのためには、理事者の見識によるところが重要な条件となるであろう。

全体を通じて

今回の視察では、三箇所の視察現場が、それぞれの状況は違えど、行政主導で実現している。

いかに行政が主体的に実現に向けてうごいているかによって、福祉に対する行政の本気度が判る気がする。町の現状を鑑みたとき、現況、町の施策が総務産業にシフトしている感じている。

今後、もっと福祉に対する施策に取り組むべきと思う。